

# くすり博物館だより

VOL. 65

2011年(平成23年)4月

NAITO MUSEUM OF PHARMACEUTICAL SCIENCE AND INDUSTRY



内藤記念くすり博物館  
〒501-6195 岐阜県各務原市川島竹早町1  
Tel: (0586) 89-2101 Fax: (0586) 89-2197  
http://www.eisai.co.jp/museum/

## 平成23年度企画展「病まざるものなし～日本人を苦しめた感染症・病気 そして医家～」 開催期間 2011年4月28日(木)～2012年3月25日(日)

内藤記念くすり博物館では平成23年度の企画展として、日本における感染症と病気、そしてそれに取り組んだ医師の歴史をテーマにご紹介しております。

日本においては、古代から疱瘡(天然痘)などの感染症が猛威をふるい、大勢の人々が病に倒れました。日本の医師は、中国や朝鮮半島から伝わった中国医学を手本に医学を学び、江戸時代には日本の風土にあった医学・薬学が発展しました。江戸時代は西洋の医学や薬学も伝来する一方、梅毒やコレラなどの恐ろしい感染症も日本に伝わりました。これらの感染症は新たな病気であり、当時は人体の仕組みや病原菌について知られておらず、症状の把握や治療・対処方法については試行錯誤の時期が長く続きました。人体の構造や病気になる仕組み、病原菌の正体が次第に明らかになり、さまざまな病気の治療が可能となったのは、明治時代以降でした。

日本にはどのような病気があり、人々はその病気をどのようにとらえ、恐れ、対処しようとしていたのかを探ると同時に、医師たちがどのように病気に立ち向かっていたのかを、主に江戸時代から昭和初期までの資料や文献から解説しております。

(監修 酒井シヅ 順天堂大学名誉教授)



### 病気との長い闘い

医学・薬学が発展した今日であっても、私たちは病気を恐れ、何とかかからないようにと願っています。まだ医学・薬学の知識が不十分だった時代、人々は病気というものをどのように考え、どう対処しようとしたのでしょうか。

日本では古代より、疱瘡や麻疹などの感染症がたびたび流行し、多くの人々が亡くなりました。古代においては中国や朝鮮半島から医師が来日し、医療活動は行われていましたが、まだ加持祈祷に頼ることが多かったといわれています。

奈良～平安時代にかけては、歴史書や貴族の日記の記録から、中風(脳卒中)、消渴(糖尿病)、瘧(マラリア)などの病気が知られていたことがわかります。この時代には国家による医師養成が行われるようになりました。やがて武士が台頭して戦乱が続いた時代になると、僧侶が困窮している人々を救うために治療を行うようになり、僧侶や武士の中から医師になる者もありました。

江戸時代には漢方医学や、オランダから伝わった蘭方医学が発達し、多くの医師がさまざまな病気治療に取り組みました。幕末にはコレラが伝来して猛威をふるったほか、明治時代には工場や軍隊を通じて、労咳(肺結核)の感染が拡大し、日本の医師は、ドイツやイギリスを通じて西洋医学を吸収し、病気の治療を推し進めていきました。



平安時代の眼病治療の様子

「疾草子」は平安時代の病気を描いた絵巻物で、医師は小刀を持ち、隣の女性は流れる血を器に受けています。白内障の手術ではないかといわれています。

# 時代とともに変わる医師

医師の役割や身分は、時代とともに変わってきました。

古代の中国や日本では、医師は「方技」、すなわち人民の生命を保つ長命術などの職人と考えられていました。

「医師」という言葉は、古代の日本では「醫」と書いて「くすし」と読みました。これは、薬の原料である生薬の担当が典薬寮の薬園師であり、処方指示されて薬を調合する役割が医師だったため、「くすし」と呼ばれていたといわれています。

診療科目は古代から平安時代頃までは、大きく分けて内科（本道）と外科に分かれていましたが、鎌倉・室町・安土桃山時代にかけては戦乱が続き、外科の中でも傷の手当を行う金創医が増えました。

江戸時代になると、五代将軍・徳川綱吉の頃に将軍やその家族等を診察する侍医をはじめとする医師団が構成され、医官制度が整えられました。当時は、公の医療制度や医学教育のための学校というものを幕府が設けていなかったため、さまざまな方法で医師になることができました。



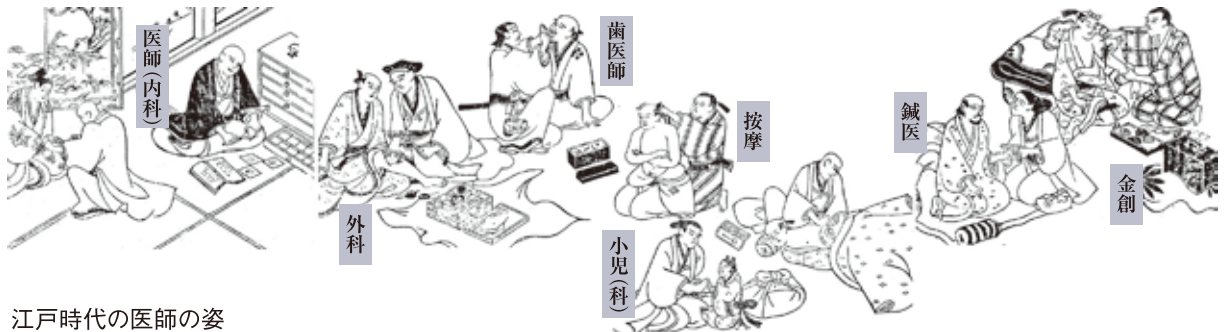
丹波康頼 (912-955) (上)

『医心方』を著した丹波康頼は平安時代の鍼博士・医博士で、日本最古の医学書『医心方』を編纂した。丹波家は和気家とともに代々官医を務めた。

「醫」の文字(右)

平安時代の百科事典『倭名類聚』には、「醫」の説明として「治病工」と書かれている。

醫  
説文云醫、伊作醫、和名久治、病工也



江戸時代の医師の姿

江戸時代の職業図鑑である『人倫訓蒙図会』には、医師としていわゆる内科のほか、金創、外科、小児科、歯科、鍼医、按摩が紹介されている。

江戸時代に医師になるには、開業している医師の元に弟子入りして修行して経験をつみ、診断ができるようになると代脈といって、師の代わりに代診させてもらえるようになり、その後独立・開業しました。また、儒学を修めた者であれば漢文で書かれた書物が読めるため、医学書を独学で読み、開業しました。特殊なケースでは、例えば産科医の賀川玄悦のように、もともと別の職業に就いていましたが、隣家の妊婦の出産を助けたことから医師になったケースもありました。また、医師のいない地域で経験を積んで診療にあたった医師もいました。

この頃、医師は剃髪して僧侶のような身なりになることが多く、僧医と呼ばれました。優秀な医師に授けられるのは僧侶としての高い位だったため、普段から僧侶のような衣服を身につけるようになりました。一方、儒学者から医師になった者は儒医と呼ばれ、儒学者風に束髪（髪を後ろで束ねた髪型）とし、僧医とは違う身なりをしました。

このように、江戸時代はさまざまな方法で医師になることができ、優秀であれば高位を授けられたり、大名のお抱え医師になり、出世することができました。しかし、医師は人の命を救う職と考えられていました。そのため、治療費は医師の側から請求するものではないとされていました。ここから、患者が医師に支払うのは治療費ではなく謝礼と考えられ、治療に用いた薬の代金という意味で「薬礼」または「薬代」と呼ばれました。現在のように治療費に定価がないため、治療後の病状から、相場より少なめの金額を渡す患者もあったようです。それにしても治療費は当時の金銭感覚では、大変高額でした。



僧医 (江戸時代)



僧医 (江戸時代)



和装の医師 (明治時代)



洋装の医師 (明治時代)



昭和初期の医師の診療衣と手術衣

# 人々を苦しめた感染症

## 疱瘡 激しい症状と後遺症に苦しむ

疱瘡は別名・痘瘡と呼ばれた天然痘ウイルスによる感染症です。日本では平安時代にわんずかさ 豌豆瘡と記されてから、たびたび流行を繰り返し、そのたびに大勢の死者が出ました。

天然痘の症状は、激しい頭痛と高熱に見舞われ、体中にできた発疹が膿疱のうほう（うみ）となり、やがてあばたとなって残るものです。膿疱の跡があばたとして残るため、「疱瘡は見目定め」といわれ、たとえ命が助かり治ったとしても、多くの人があばたで容姿が変わり、苦しみました。奥州の武将・伊達政宗も疱瘡の後遺症で右目を失明し、独眼竜と呼ばれています。

疱瘡の研究が進んだのは17世紀半ばで、中国・明代の医師であった戴曼公たいまんこうは日本に疱瘡の治療の秘訣を伝えました。1796年にイギリスの医師・ジェンナーが牛痘接種法を発見し、嘉永2年（1849）には日本にも伝わり、各地の医師らにより予防接種が勧められました。



『疱瘡面部伝』  
天然痘の症状を図で示した本

## 江戸～明治に描かれた病魔の姿



疱瘡

## 麻疹 命定めと呼ばれた病

麻疹ましんは麻疹ウイルスによる感染症で、10世紀にあかもがさ「赤斑瘡」という名前で記録されています。麻疹にかかると発熱や咳などの症状を経て、4、5日間全身に赤い小さな発疹が続きます。麻疹は疱瘡より感染力が強く、「麻疹は命定め」、つまりかかると命を落とすと恐れられた病気でした。

麻疹は疱瘡と同様、生涯に一度麻疹にかかれば再びかかることがなく、免疫ができた人の数が多い間は大規模な流行は見られず、15～20年間周期で流行しました。そのため医師が麻疹の患者を診察することは生涯に一、二度であり、治療経験が少ないために治療が難しかった一面もあったようです。



生薬・烏犀角  
麻疹の際に解熱剤に用いられました。



麻疹

## 梅毒 長年にわたり体を侵す病

梅毒びいどくは細菌・梅毒トレポネーマによる性感染症で、15世紀末にヨーロッパ人によりアメリカ大陸からヨーロッパ、アジアを経由して16世紀頃に日本へもたらされました。黴瘡びいそう、唐瘡ようばいそう、楊梅瘡、ひえ、しつなどの別名があります。特効薬がなかった江戸時代には鼻が落ち、皮膚や筋肉、骨に腫瘍ができたり、脳や神経が侵される人も数多くいました。このような症状は数年から数十年かかって進行し、末期には体が腐乱して穴が開くこともあり、苦しみながら死を迎えました。

水銀中毒のおそれがありましたが、ヨーロッパででも日本でも水銀軟膏や水銀の蒸気による治療法が行われました。江戸時代に大阪で梅毒の専門医として活躍した船越敬祐は自分もひどい梅毒にかかりましたが、患者の治療を行うとともに梅毒の専門書を著したほか、挿絵入りの読み物『(絵本) 黴瘡軍談』を出版し、一般の人々に治療法を紹介しました。



梅毒

## 虎列刺(コレラ) 急激に死へと進む

コレラは18世紀にインドからヨーロッパ人を通じて世界中に広まりました。コレラ菌による感染症であり、菌が人体内で排出する毒素によって激しい下痢と嘔吐が引き起こされました。症状の進行が早く、2～3日のうちに死んでしまうほどだったため、「三日ころり」、感染の速さを千里を走る虎に、また恐ろしさを狼になぞらえて「虎狼痢」「虎狼狸」と書くこともありました。

安政5年（1858）の大流行の折には、緒方洪庵は、西洋医学の書物からコレラに関する項目を急いで翻訳し、に『虎狼痢治準』として緊急出版して、当時としては最新の治療法を紹介しました。



虎列刺

# おくすり今昔

## ■ことわざや慣用表現に見る病名

普段の生活で、例えば「鬼の霍乱」という言葉を使うことがあります。そしてこの「霍乱」という言葉が、実は昔の病気の名前なのです。

「霍乱」は吐くことと下痢が同時に起こる症状を指し、現在の急性胃腸炎などと考えられています。幕末には激しい下痢を起こすコレラも含まれていたようです。「鬼の霍乱」は普段体が頑強な人が急な病気にかかることを意味していますが、意外な人が急に病気にかかることを例えた表現にぴったりの病名と思われる。

このほかにも、「溜飲が下がる」の「溜飲」は、消化不良ですっぱいげっぷが上がってくる症状で、現在では慢性胃炎ではないかといわれています。それが下がってすっきりすることを表しています。

「癩にさわる」の「癩」は、胸や腹に激痛が走る症状のことです。現在では胃癒攣や胆石症、心筋梗塞などの病気、また一種の神経症のようなものも含まれると考えられていました。激痛の原因の場所に触れられて腹を立てたことから、このように言われたのでしょうか。

また、「腹の虫がおさまらない」「ふさぎの虫」「虫酸が走る」「虫の居所が悪い」など、「虫」がつく言葉もよく使いますが、これは江戸時代までは体の中に病気を引き起こす「虫」がいると考えられていたため、自分の気持ちをその「虫」に託して表現したものと思われる。なお、「虫」と呼ばれた病気には、こどもの「疳の虫」のような神経過敏の症状だけでなく、寄生虫症も含まれていました。



企画展図録監修  
酒井シヅ順天堂大学名誉教授



企画展の図録を監修していただいた酒井シヅ教授は、順天堂大学医学部で長年医学史の研究に携わってこられました。『病が語る日本史』（講談社）など医学の歴史に関するご著書を多数出版されています。現在は日本医学史学会会長を務めていらっしゃいます。

『かぞのかんのくすり  
たんしゃくりういんのくすり』(右)

江戸時代の薬の広告。疳の虫、痰、癩、溜飲の薬の効能などが書かれている。このような病気は、市販の薬を用いて治療することが多かった。

## とびっくす

### ■資料の貸し出し

今年1月に、東京大学医学部の「健康と医学の博物館」のオープニング展示に天然痘の予防接種の資料を貸し出しました。4月には日本泌尿器科学会総会（名古屋）の学術展示に、書籍『内科秘録』など、泌尿器の歴史に関する資料をはじめ、多数の資料を貸し出し、多くの皆様にご覧いただきました。

### ■『くすり博物館だより』の発行について

内藤記念くすり博物館では、年2回『くすり博物館だより』を刊行しておりますが、本年は年1回の発行とさせていただきます。

バックナンバーにつきましては、2001年以降のものについてはウェブサイト「くすりの博物館」で公開しておりますので、こちらをご利用ください。

### ◆◆資料・図書ご提供者ご芳名◆◆

鹿野義弘  
岸勝美  
斉藤龍夫  
彰古館  
白井英夫  
武田科学振興財団  
竹原万雄

～ありがとうございました～  
(敬称略/五十音順)

### ■薬草園で花が咲きました

薬用植物園ではこのたび新たにアーモンドの苗を植えたところ、まだ風が冴たい4月上旬に花が咲きました。温室ではお香の原料となるジンコウの花や、インドやタイで実をスパイスとして使うタマリンドの花も咲きました。



アーモンド



ジンコウ

### 《新任スタッフ紹介》

はじめまして。この4月から薬草園でお世話になります。生物学と免疫学が専門です。人とくすり生き物（薬草）のつながりをお伝えできればと思います。よろしくお願ひします。



伊澤 大

### 内藤記念くすり博物館

開 館 9:00-16:30  
休 館 月曜日・年末年始  
館 長 永縄厚雄  
学 芸 員 稲垣裕美(編集担当)  
学芸員・司書 野尻佳与子 伊藤恭子  
庶 務 森田麻起子  
沼田望(見学受付)  
田中康恵(見学受付)  
薬用植物園 伊澤大  
(栽培管理) 菊谷辰行 亀谷芳明